

山田は、松山建設の中山宛にメールを送信すると、その後、中本設備の野村に電話を入れた。

「はい、中本設備でございます」

「吉崎工業の山田と申しますが、営業部の野村さんをお願いします」

「少々お待ち下さい」

「はい、営業部です」

「吉崎工業の山田と申します。いつもお世話になっております。恐れ入りますが、野村さんをお願いします」

「申し訳ありません。野村はただ今席をはずしておりますが」

「何時頃お戻りになりますか？」

「今日は一日、横浜の本社へ行っておりますので、恐らくこちらへは戻ってこないと思います」

「そうですか。明日の予定はいかがででしょうか？」

「明日は八時半にはこちらへ出社する予定です」

「では、明日の朝でも構いませんので、大和支店の方にお電話いただきたいとお伝え願えますか？ 一応電話番号を申し上げます。〇四六―二七四―二四七二です」

「〇四六―二七四―二四七二ですね。失礼ですが、お名前をもう一度お願いします」

「吉崎工業の山田です」

「吉崎工業の山田様ですね。明日の朝、野村に申し伝えます」

「よろしく願います」

「失礼します」

受話器を置くとすぐに山田の電話が鳴った。

「はい、山田です」

「松山建設の中山です。お世話になっております。先程送っていただいたメールの件でお話したいことがあるのですが、今お時間は大丈夫でしょうか？」

「すみません。この後ちよっと打合せが入ってるんですよ。先程のメールですが、

一応大まかな部分についてだけ先に目を通していただこうと思って送らせていただいたのですが、詳しい内容については一度お会いしたうえで、と考えております。如何でしょうか？」

「はい、構いません。明日以外でしたら私はいつでも結構ですので、山田さんの都合のいい日に合わせます」

「それでは、来週の木曜日はいかがでしょう？ 二月四日ですが」

「はい、大丈夫です」

「では大変申し訳ありませんが、時間と場所については近いうちに追ってこちらからご連絡するということですのでよろしいでしょうか？ 勝手言っすみません」

「とんでもないです。携帯のほうにかけてもらえれば、いつでもつながりますので」

「わかりました。では失礼します」

山田は電話を切ると、慌てて応接室へ向かった。